Osaka University Knowledge Archive

Title	ムハンマド・フサイン・アーザードのペルシア詩論について
Author(s)	松村, 耕光
Citation	言語文化研究. 2014, 40, p. 143-152
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27608
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ムハンマド・フサイン・アーザード のペルシア詩論について

松　村　耕　光

Muḥammad Ḥusain Āzād's Appraisal of Persian Poetry

MATSUMURA Takamitsu

Summary: Muḥammad Ḥusain Āzād (1830-1910), the well-known author of *Āb-e Ḥayāt* (*The Water of Eternal Life*), an epoch-making book describing a history of classical Urdū poetry published in 1880, is also a historian of the Persian language and its literature. *Sukhandān-e Fārs* (*Poets of Persia*), published in 1907, is his major work in this field. In this book Āzād divided a history of Persian poetry into four periods and described it as a history of degradation: from natural poetry to artificial poetry. He criticized artificiality in poetry in this book as he did in *Āb-e Ḥayāt*. This book is very important to understand Āzād's view of poetry, generally, and that of Persian poetry, particularly.

キーワード：ムハンマド・フサイン・アーザード，ペルシア詩，『ペルシアの詩人たち』

はじめに

ムハンマド・フサイン・アーザード（Muḥammad Ḥusain Āzād 1830-1910）は，ウルドゥー詩の歴史に関する著書『生命の水（*Āb-e Ḥayāt* 1880 年）』を著したことで有名であるが，ペルシア語やペルシア詩にも造詣が深く，ペルシア語やペルシア詩の歴史に関する著述も残している。彼のペルシア語やペルシア詩に対する見方を知る上で特に重要なのは，『ペルシアの詩人たち（*Sukhandān-e Fārs*）』である[1)]。

1）アーザード研究者アスラム・ファッルヒーは，ペルシア文学についてウルドゥー語で書かれた 2 冊の重要な書物として，シブリー（Shiblī 1857-1914）の『ペルシアの詩（*Sh'ir al 'Ajam* 全 5 巻，1908-1918 年）』とアーザードの『ペルシアの詩人たち』を挙げ，「『ペルシアの詩』は批評の点で非常に価値のある書物であり，『ペルシアの詩人たち』は研究の点で非常に価値のある書物と言える」と述べている（Aslam Farrukhī, *Muḥammad Ḥusain Āzād: Ḥayāt aur Taṣānīf*, vol. 2, Anjuman-e Taraqqī-e Urdū, Pakistan, Karachi, 1965. p. 453）。

アーザードには，『ペルシアの画廊（*Nigāristān-e Pārs*）』という著作もある。これは，ルーダキー（Rūdakī d. 940）からワーキフ（Wāqif d. 1776/77）までの，イランやインドのペルシア語詩人 36 名のタズキラ（tadhkirah 詩人の伝記的事実，詩の特徴や評価，逸話が簡単に記され，詩人の代表句が付された詞華集）である。アーザードの孫アーガー・ムハンマド・ターヒル（Āghā Muḥammad Ṭāhir）によって原稿が発見され，出版された。出版年は不明であるが，ターヒルが書いた序文の日付は 1922 年 1 月 16 日である。ファッルヒーは，本書は 1872 年以前――『ペルシアの詩人たち』の基になる講演が行われる以前――に執筆されたと考えている（Aslam Farrukhī, op. cit., vol. 2, p. 458）。詩人の順番は必ずしも生年の順番にはなっておらず，ファッルヒーは，アッタール（'Aṭṭār d. 1221），ルーミー（Rūmī d. 1273），ウマル・ハイヤーム（'Umar Khaiyām d. 1131）が収録されていないので，本書は重要なペルシア詩人を扱った網羅的な著述にはなっていないと述べている（Aslam Farrukhī, op. cit., vol. 2, pp. 460-461）。また，ファッルヒーは，構成上の問題以外に，重要な詩人にあまり頁を割かず，重要ではない詩人に多くの頁を割くようなバランスの悪さがある，と本書を批判している（Aslam Farrukhī, op. cit., vol. 2, pp. 463-464）。

『ペルシアの詩人たち』は，言語一般について，そしてサンスクリットとペルシア語の同源性について論じた第 1 部と，ペルシア語，ペルシア文学の歴史を論じた 11 の講演から成る第 2 部で構成されている。生前出版されたのは、第 1 部だけである（1872 年にラホールで出版された）[2)]。アーザードは 1887 年に第 1 部，第 2 部の推敲を行ったが，出版には至らなかった。第 1 部，第 2 部両方が合わされて出版されたのは 1907 年のことであるが，晩年，アーザードは精神を病んでいたので，出版は息子のアーガー・ムハンマド・イブラーヒーム（Āghā Muḥammad Ibrāhīm）の手によって行われた。

本稿においては，『ペルシアの詩人たち』を基に，アーザードがどのような文学観に基づいてどのようにペルシア詩の歴史を見ていたか，検討することにしたい[3)]。

ペルシア詩の時期区分

まず，アーザードがペルシア詩の歴史をどのように理解していたのか，確認しておこう。

アーザードのペルシア詩史に関する見方が最もよく表れているのは，11 の講演を収録した『ペルシアの詩人たち』第 2 部の最後の講演「ペルシア詩の歴史」である[4)]。

この他にムガル皇帝アクバルの時代に関する歴史書『アクバルの宮廷（*Darbār-e Akbarī* 1898 年）』にも，当時のペルシア語詩人への言及が見られる。本書の、文人アブル・ファズル（Abu'l-Faẓl d. 1602）の項は和訳されている。近藤治，「アーザードのアブル・ファズル伝について」，『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』，5 号（2009 年），6 号（2010 年），7 号（2011 年），8 号（2012 年）を参照。

また，美文集『奇想の魔術（*Nairang-e Khayāl*）』に収められた「遍き名声と永遠なる存続の宮廷（Shuhrat-e 'ām aur baqā-e dawām kā darbār）」にもペルシア詩人への言及が見られる（『奇想の魔術』は 2 部構成になっており，第 1 部は 1880 年に，第 2 部は 1923 年に出版された）。

以上のような著作の他に，アーザードはペルシア語の読本や文法書も編纂している。ペルシア語やペルシア詩への関心には並々ならぬものがあったようで，アーザードは休暇を取って書籍収集と辞書編纂資料収集のために 1885 年 9 月から 1886 年 7 月までイランを旅行している。

2）ジャーリビーは、講演原稿は 1872 年に準備され，第 1 講演と第 2 講演は 1876 年に出版された，と記している（Jamīl Jālibī, *Tārīkh-e Adab-e Urdū*, vol. 4, Majlis-e Taraqqī-e Adab, Lahore, 2012, p. 1009）。別の箇所では，本書は 1872 年から 74 年の間に準備された講演原稿を収録したもので，第 1 部は 1876 年に出版されたと記している（Ibid., p. 1036）

ファッルヒーは，本書はアーザードの講演をまとめたもので，第 1 部の講演は 1872 年，第 2 部の講演は 1874 年に行われた，と述べているが（Aslam Farrukhī, op. cit., vol. 2, p. 373），第 2 部に収められた講演のタイトル・ページによると，第 2 講演，第 3 講演の講演日はいずれも 1872 年 2 月 19 日，第 4 講演の講演日は 1877 年 3 月 1 日である（他の講演の講演日は記載されていない）。1884 年 3 月 2 日付のアーザードの書簡には，ペルシア語，ペルシア詩文に関して 1874 年に行った 10 回分の講演草稿が手元にあると記されており（Sayyid Murtaẓā Ḥusain Fāẓil Lakhnavī, ed., *Makātīb-e Āzād*, Majlis-e Taraqqī-e Adab, Lahore, 1966, p. 210），講演の行われた期日ははっきりとは解らない。講演日や本書の成立に関してはさらに調査する必要があろう。

3）本稿においては以下のテキストを使用する。

Sukhandān-e Fārs, Uttar Pradesh Urdu Academy, Lucknow, 1979.

第 1 部は 106 頁まであり，第 2 部は頁番号がまた 1 から始まっている（本稿の引用はすべて第 2 部から行われている）。

4）『ペルシアの詩人たち』第 2 部には以下のような講演が収録されている。

第 1 講演（講演日不記載）古代ペルシアの歴史
第 2 講演（1872 年 2 月 19 日）古代ペルシアの言語状況
第 3 講演（1872 年 2 月 19 日）ペルシア語がイスラーム到来以降どう変化したか
第 4 講演（1877 年 3 月 1 日）現代ペルシア語における第 2 の変化
第 5 講演（講演日不記載）古代ペルシア人の法と慣習
第 6 講演（講演日不記載）イスラーム到来後のイラン人の習慣習俗
第 7 講演（講演日不記載）国土とその春の季節が文芸に如何なる影響を及ぼすか
第 8 講演（講演日不記載）ペルシア語の性格と諸言語の性格は如何なる関係にあるか
第 9 講演（講演日不記載）アラビア語との接触によってペルシア語はどのように変わったか
第 10 講演（講演日不記載）ペルシア語はインドでどのように変化したか
第 11 講演（講演日不記載）ペルシア詩の歴史

この講演でアーザードは，初期ペルシア詩について触れた後，「研究者たちは最初期から今日までのペルシア詩を，その諸変化に着目して，いくつかの段階（ṭabqē）に分けた。見識ある者がそれらの詩作品を検討すると，時代ごとに詩風がはっきりと異なっていることを見て取ることができる」と述べ，ペルシア詩の歴史を次のような4段階に分けて論じている（p. 265）[5]。

第1段階　ルーダキー（Rūdaqī），アサディー・トゥースィー（Asadī Ṭūsī），ダキーキー（Daqīqī），フィルダウスィー（Firdausī）等[6]

第2段階　ハーカーニー（Khāqānī），アンワリー（Anwarī），ニザーミー（Niẓāmī）[7]

第3段階　サアディー（Sa‘dī），ハーフィズ（Ḥāfiẓ）

第4段階　ジャラール・アスィール（Jalāl Asīr），カースィム・マシュハディー（Qāsim Mashhadī），カースィム・ディーワーナ（Qāsim Dīwānah）等[8]

第2段階以降の取り扱いはきわめて簡単になっており[9]，決して充実した内容の講演とは言えないが，それでもアーザードの基本的な考え方を知ることができる。各段階に関するアーザードの見解を次に見ていくことにしよう。

第1段階の詩についてアーザードはこう述べている。

「何らかの出来事が詩心を刺激したり，（何かの）必要によって詩想が展開すると，詩句が言葉となって口から現れ出た。宗教的な忠告や説諭が行われ，酒，春の情景（が語られ），天，運命に対する不満が述べられた。（それらの詩句は）俗世間に対する嫌悪感を生み出した。何事にも教訓が込められていた。愛のない場所，愛のない心はない。それで恋愛詩も作られた。パンを求めない腹はない。それで君主をほめそやしていたが，闘志，勇気，

5）ファッルヒーは，「アーザードは旧来のタズキラ作家たちに倣ってペルシア詩人たちを四つの段階に分けた」と述べている（Aslam Farrukhī, op. cit., vol. 2, Karachi, p. 450）。『ペルシアの画廊』でアーザードは，ハーネ・アールズー（Khān-e Ārzū d. 1756）の以下のような古典ペルシア詩史の区分に言及し，
（1）ルーダキー（Rūdaqī），アサディー・トゥースィー（Asadī Ṭūsī），フィルダウスィー（Firdausī）等（原文ではフィルダウスィーの次にまたトゥースィーと記されている）
（2）ニザーミー（Niẓāmī），アンワリー（Anwarī），ハーカーニー（Khāqānī），カマール・イスマーイール（Kamāl Ismā‘īl）等
（3）サアディー（Sa‘dī），ハーフィズ（Ḥāfiẓ），アミール・フスラウ（Amīr Khusrau），ジャーミー（Jāmī）等
（4）ウルフィー（‘Urfī），ズフーリー（Ẓuhūrī）等
第1段階の詩と第2段階の詩には「少しの違い」があり，第3段階の詩人たちは，第1段階の詩風を「さらに変化」させ，第4段階では，「装飾（rangīnī）と繊細さ（nazākat）がさらに増えた」と各段階の違いを極めて簡単に説明している（*Nigāristān-e Pārs*, Azad Book Depot, Lahore, 1957, pp. 195-196）。

6）講演では，ルーダキー，ダキーキー，フィルダウスィー，アサディー・トゥースィー，ナースィレ・フスラウ（Nāṣir-e Khusrau），ウンサリー（‘Unṣarī），マヌーチフリー（Manūchihrī），ファッルヒー（Farrukhī）の順に言及されている。

7）講演では，ハーカーニー，ニザーミー，アンワリーの順に言及されている。

8）講演では，カースィム・マシュハディー，カースィム・ディーワーナへの言及は見られない。

9）頁番号は以下の通り。
第1段階：pp. 265-300
第2段階：pp. 300-308
第3段階：pp. 308-312
第4段階：pp. 312-315

正義等の美徳と教訓に基礎が置かれていた。要するに何らかの現実性(aṣl)があったのである。」(pp. 265-266)

この時期の代表的詩人ルーダキーの詩に触れて，アーザードは次のように述べている。

「文芸が幼少期にあるとき，言語は現実性（aṣliyat）以外の何物をも生み出せない。想像を巡らせることはできず，現実離れした主題には手を伸ばさない。身近なもの，目の前にある、はっきりしたものを手に取るのである。」(p. 268)

「緊密な構成，正確な言葉遣い，主題の高い想像性（buland-parwāzī)，誇張など今日のペルシア詩が悪評を得ているようなものは全く見られない[10)]。坐って話をしただけでも，それらのせいで現実性は傷つけられてしまうのである。」(p. 269)

アーザードは,「ルーダキーの声を聞いたあと，フィルダゥスィーの作品の響きを耳にすると, 詩心（を持った者）は, 子供であったペルシア詩がどうして突如として一人前の若者となったのかと驚くのである」(p. 276）と述べ，フィルダウスィーの詩を高く評価しているが，フィルダゥスィーの詩に関しても次のように，技巧性がなく、自然であるという評価を与えている。

「彼の詩は隠喩の色彩や技巧のエナメル装飾を求めてはいない。明解な詩句。平易な単語や慣用句を使った表現。簡明な言葉。天与の泉の水が自然の川を流れて行くのである。」(p. 277)

第 2 段階についてアーザードはこう述べている。

「第 2 段階（の詩人たち）はヒジュラ歴 500 年（西暦 1106/7 年）に詩の国を栄えさせた。以前は自然な言葉が詩の大地に花を咲かせていたが，今や言葉が力を，思考が飛翔を，視線が熟思をさらに生み出すようになった。ハーカーニー，アンワリー，ニザーミーが現れて詩は衣装を，詩想は趣を変えた。アラビアの学問が国に広がり，修辞学の書物がペルシア語で書かれ，アラビアの言葉が幅を利かせるようになり，単語や意味に修辞が知的な彩りを与えた。第 1 段階では話し言葉と書き言葉は同一であり、韻律を取り除けばその詩は，技巧性のない，自然な散文となったが，今や次々と隠喩の花が咲くようになった。(…）以前は『薔薇の色』、『夜鶯（ブルブル）（bulbul）の歌声』（という言葉）によって春を表現していたが，

10)「緊密な構成」,「正確な言葉遣い」,「主題の高い想像性」,「誇張」が過度に重視されているのでペルシア詩は批判的になっていると言いたいのであろう。

今や『薔薇の（ような）恋人の顔』、『夜鶯（ブルブル）（という）歌手の声』（という言葉）によって表現するようになった。」（pp. 300-301）

アーザードによれば，「第 1 段階の詩人たちの詩には平易さ（sādagī）、実直さ（sangīnī）、着実性（ustwārī）があり，第 2 段階の詩には装飾性（rangīnī），味わい深さ（laṯāfat），柔軟性（mulā’imat）があった」（p. 304）。アーザードは，この詩風の違いの原因を詩人たちの活動の舞台が荒野から宮廷に移ったことに求めている。

「最初の詩人たちは山や荒野の住人であった。その純朴な性格や気どりのない言葉から詩が生まれていた。詩は宮廷で作られるようになり，廷臣や知識人が詩を作るようになった。彼らの服装，立居振舞，飲食などのあらゆる面に優美さと洗練された趣味が溢れていた。彼らの言葉もまた同様で，そのような言葉が詩に現れた。次第に以前の美点は消えていった。」（p. 304）[11)]

第 3 段階についてアーザードは次のように記している。

「この段階では他の主題が後回しにされるほど，いや，捨てられるほどガザル（ghazal）作詩が人気を博した。発句と結句でガザルは限定された。王侯貴族に対する過度の称賛が行われたためにカスィーダ（qaṣīdah）が王座に就いた。マスナヴィー（mathnavī）も存続したが，恋愛を主題とするマスナヴィーであった。他の内容は付けたしであり，本題とは無関係であった。」（p. 308）

この時期の代表的詩人としてアーザードは，サアディーとハーフィズの二人の詩人の名を挙げ，次のように述べている。

「シャイフ・サアディー（Shaikh Sa‘dī）：この時期の甘美な詩人である。現在でもその味わいを失ってはいない。詩であれ，散文であれ，話をしているかのようである。素晴らしいのは，書物に散文で書かれた教訓がその詩を偉大なものとしていることである[12)]。隠

11）第 1 段階と第 2 段階の違いをアーザードは得意の擬人法を用いて次のように表現している。
「初めの平易さ，後の技巧についてはこう考えればよい。詩の街があり，店が並び，市が立っている。第 1 段階の詩人たちの――特にフィルダゥスィーの――詩は，その中にいる，森や山のふところで育った一人のレスラーである。森や山の食べ物によって腕には力があり，自然風土のおかげで顔は若々しい。森や山の素朴でゆったりとした衣服を身に付け，ターバンには数枚の緑の葉と薔薇の蕾を一つ付けている。彼は自分の足でしっかりと立ち，心のリズムに従って身を揺すって歩く。」（p. 305）
「後代の詩人たちの詩を見よ。街の人たちが歩いている。きれいに洗った顔を髭が引き立てている。髪は櫛によって，目は黛によって，乾燥した顔は油によって整えられている。細見の体にぴったりとした服を纏っている。手には繊細な短刀を持ち，悠然と歩いている。」（p. 305）

12）散文で書かれた『薔薇園（*Gulistān*）』の訓話が詩でも見事に表現されていると言いたいのであろう。

喩も用いられているが，意味を難解にしてはいない。それらは明快で，味わいを増加させている。」（p. 308）

「ハージャ・ハーフィズ（Khwājah Ḥāfiẓ）はガザル詩集しか残さなかった。名ばかりのカスィーダが 4，5 篇あるのみである。そのガザルは今尚人々に敬愛されている。技巧の作為は見られず，隠喩による装飾も行われていない。心の清らかさが口から現れ出たのである。」（p. 310）

第 4 段階はペルシア詩が現実性を喪失する時期である。

「サアディー，ハーフィズの時代までのペルシア語詩人たちが見事な，素晴らしい様式，隠喩，技巧的表現を使い果たしてしまうと，後代の者たちは，隠喩の上に隠喩を重ね，技巧的表現の上に技巧的表現を重ねて意味に繊細さを生み出す他に，そのようにして聴衆に『素晴らしい。新しい主題だ』と言ってもらう他に，手だてがなくなってしまった。このような様式を始めたのは，ジャラール・アスィール，カースィム・マシュハディー，ムッラー・ズフーリーなどである[13)]。彼らは称賛を求めるあまり，現実性を捨て，技巧的表現を現実よりも優先してしまった。現実でないものを現実であると見做し，それに関連した事柄について想像を巡らせ始めた。その結果，現実性は影も形もなくなり，有り得ないような想像の産物だけが残ったのである[14)]。」（pp. 312-313）

アーザードは，「ヒジュラ歴 1200 年（西暦 1785/6 年）以降，雲が湧き，風が吹き荒れた，まさにその場所で改革が始まった。イランの人たちはサアディー，ハーフィズの詩風でガザルを，ハーカーニー，アンワリーの詩風でカスィーダを書き始めた」（p. 315）と述べ[15)]，ペルシア詩の改革運動に言及して講演を終わっている[16)]。

13）この詩風で詩を書いたインドのペルシア語詩人としてアーザードは，ガニー・カーシミーリー（Ghanī Kāshmīrī），ミルザー・ベーディル（Mirzā Bēdil），ナースィル・アリー（Nāṣir ʻAlī）の名を挙げている。

14）ペルシア語の特徴について論じた『ペルシアの詩人たち』の第 2 部第 8 講演でアーザードはこう述べている。
「隠喩，直喩等の技巧は美点であったのに，結局は欠点となってしまった。実のところ，隠喩，直喩は色彩であった。物の本質をそれは美しく彩るのである。このような技巧は詩文の意味を明確にし，意味がうまく，味わい深く伝わるようにしていた。数百年にわたる色彩の過度の使用によって現実性は幾重にも重なった幕の背後へと追いやられ，次第に外へ追い出されてしまったのである。」（p. 211）

15）アーザードは第 2 部第 4 講演で，ヒジュラ歴 1200 年（西暦 1785/6 年）から 1300 年（西暦 1882/3）にかけてのペルシア詩の一般的状況について次のように述べている。
「（ヒジュラ歴）13 世紀にはペルシア語の劣悪ぶりは極限に達した。イラン本来の自然な言語（mulk kī ṭabʻī zabān）は数百年にわたって無力なままであったので，役目を果たすことができなくなっていた。それどころか，麻痺状態に陥っていた。ペルシア語能力を自慢していた想像力豊かな詩人たち（khayāl-band）は貧困に喘いでいた。その富であった想像力は消え去っており，過去の偉大な詩人たちの布をつぎ当てに用い，何とかしのいでいた。ありふれた隠喩，昔ながらの直喩を用い，偉大な詩人たちの優れた句を借用し，切り貼りをして詩作していた。」（p. 94）

16）アーザードが念頭に置いているのは，18 世紀後半にイスファハーンで始まった詩の復古（bāz-gasht）運動であろう。

アーザードによるペルシア詩評価

以上のようにアーザードは，ウルドゥー古典詩の場合と同じように，ペルシア古典詩を複数の段階に分け，ペルシア古典詩の歴史を，素朴な詩が次第に隠喩などの技巧や虚構性によって複雑化――非現実化――していく過程として描いている[17)]。

アーザードは，第 2 段階について触れた部分で，「この点に関して一方を他方より高く評価することはアーザードの行うべきことではない。それぞれの嗜好は異なっているのだから。第 1 段階の詩を好む者もいれば，第 2 段階の詩を好む者もいて，『この（自分たちの好む詩風の）その美点が発展すればするほど詩の表現力は発展したことになる』と述べている」（p. 305）と，第 1 段階と第 2 段階の詩の違いについて述べながらも，その評価については聴衆・読者に判断を委ねているが，実際にはアーザードは第 1 段階の説明の中で，

> 「フィルダウスィーの詩には隠喩はほとんど用いられていない。用いられていないと言ってもよいぐらいである。ニザーミーは直喩を隠喩に替え，隠喩の上に隠喩を重ねた。このために内容は豊かになったが，明瞭さの代わりに複雑さや難解さが生じ，現実性（aṣliyat）が消えてしまった。」（p. 281）

と第 2 段階の詩風に否定的な見解を述べている。さらに第 4 段階の説明においてアーザードは，複雑化したペルシア詩に対して以下のように明確に批判的な態度を示している[18)]。

「ヒジュラ歴 900 年（西暦 1494/5 年）以降，詩の国に大きな変化が生じた[19)]。詩が幼少

17）アーザードによるウルドゥー古典詩の時期区分に関しては，拙稿，「『生命の水』におけるウルドゥー古典詩の時期区分について」，『大阪大学世界言語研究センター論集』，第 1 号，2009 年，を参照。

18）アーザードはジャラール・アスィールの，

Tā kaē az ‘aks-e tū ā’īnah gulistāṅ gardad
いつまでおまえの影で鏡は花園であり続けるのか
Sū-e ‘āshiq nigāhē tā hamah tan jāṅ gardad
求愛者に目を（向けよ）、全身が命となるように

という句を複雑化した句の例として引用し，「恋人よ，おまえは糸杉のような長身，水仙のような目，薔薇のような頬，ヒヤシンスのような巻毛などの美しい輝きで春の花園のようである。化粧するためにずっと鏡に見入っているが，いつまでその美しい輝きで鏡を花園としているつもりなのか。恋する者にも目を向けよ。とても優れた資質を持っており，一目見てくれれば，その体は命のように美しく輝くであろう」（p. 314）というのがこの句の意味であると述べた後，次のように具体的にこの句を批判している。

「第 1 半句を見るがよい。顔という言葉だけでこのような花園の様子を無知な者は理解できるであろうか。現実的にも有り得ないことであるが，姿が映るだけで鏡は花園になるであろうか。第 2 半句の内容はさらに厄介である。体がどうして命になるであろうか。しかもたった一目見られただけで。」（p. 314）

19）サファヴィー朝のペルシア詩に言及していると思われる。第 2 部第 4 講演でヒジュラ歴 900 年（西暦 1494/5 年）から 1000 年（西暦 1591/2）のペルシア語についてアーザードはこう述べている。

「この世紀にトルコ人たちは権勢を失い，イランにサファヴィー朝の時代が始まった。この王朝の統治，敬虔な者たちの影響で人々の心に尊敬の念が生まれた。多くの人々が信奉者となり，その尊崇の念は神秘家たちを清貧の席から王国の王座に坐らせた。彼らは父祖の学問を守り，技芸を学ぶ者たちを育成した。あらゆる学問，芸術に関して本が何冊もペルシア語で書かれた。学芸は明るく輝く隠喩，光を放つ直喩，色彩豊かな想像で飾り立てられた。内容は充実し，水滴は大海に，粒子は太陽となったのであった。」（p. 79）

期にあるときには誰もが詩を楽しめるものである。理由は，既に述べたように，どこにもあるような，いつでも目の前にあるような直喩や隠喩で表現されているからである。或る程度時間が経つと，それらは詩人たちによって使い尽くされてしまい，新しいことを述べようとする後代の詩人たちは，微細な，深遠な，高尚な，関係性の薄い技巧的表現や隠喩で表現する他なくなってしまう。そのために詩は繊細なものではなく，不分明なものとなり，よく考えないと解らない詩，無味乾燥な詩となってしまうのである。」（p. 312）

「富と安寧が広がると想像の花園が人気を博するようになる。上記の詩人たち（第 4 段階の詩人たち）は，詩を愛好する宮廷から，追い出されるどころか，名誉のローブそして『想像力豊かな詩人（khayāl-band）』，『意味の創造者（ma‘nī-āfrīn）』という称号を獲得した。流麗な詩人はそのような想像を詩にはしなかった。その詩は魅惑的で感銘を与えたが，タズキラにはこのように書かれたものであった――『簡素な詩を書くものの優れた詩人である』，『前代の詩人たちの歩き方で詩の道を歩いている』などと。」（p. 313）

「確かに詩人は純粋な真実や現実的事実を偶然にしか詩にせず，大抵は想像したことを詩にしているが，想像にも，有り得るような想像，現実にあっても不思議ではない想像と有り得ない想像とがある。この詩人たち（第 4 段階の詩人たち）は有り得ないことを有り得るとすることが腕の見せ所であると考えた。有り得なければ有り得ないほど素晴らしい，と。このような技芸は国内では上記のような称号（『想像力豊かな詩人』，『意味の創造者』という称号）をもたらしたが，国外では悪評を得たのである[20]。」（p. 314）

アーザードは，『生命の水』で隠喩などの技巧の（過度の）使用や奇想は詩の現実性を失わせ，感銘を与える力を奪ってしまう，と述べているが[21]，以上のように『ペルシアの詩人たち』においても同種の批判的見解を述べているのである[22]。

20）アーザードは西欧人のアジアの詩に対する評価を気にしていたようである。彼はこう記している。
「詩から現実性が消えてしまい，表現力が衰えてしまったこと――これは哀しむべきことである。これを見て西欧の知識人たちはこう判定したのである――アジアの詩には現実的根拠がなく（原語は bē-bunyād。unnatural と英単語がウルドゥー文字で括弧書きしてある），現実味のない内容であり，その言語には現実を表現する能力がない，と。」（p. 313）

21）拙稿，「『生命の水』序論に見られるアーザードのウルドゥー語・ウルドゥー詩改革論」，『大阪外国語大学論集』，第 33 号，2005 年，を参照。

22）『ペルシアの画廊』でもアーザードは，ミルザー・サーイブ（Mirzā Ṣā’ib）の項で，「ミルザー・サーイブ。この優れた詩人の本名はムハンマド・アリー（Muḥammad ‘Alī）。生まれはタブリーズ。このように雄弁で見事な詩人，新しい詩想，優れた技巧の持ち主はそれまで存在しなかった。初期には意味表現と言い回しの妙しかなかった。ズフーリーやウルフィーなどの後代の詩人たちは，隠喩や技巧を度を越して用いたので多くの困難が生じ，言葉の流れに問題が生じたが，彼（サーイブ）は言葉の流麗さを蘇らせ，隠喩の面白味も残したのである」（*Nigāristān-e Pārs*, Azad Book Depot, Lahore, 1957, p. 208）と，また，アブー・ターリブ・カリーム（Abū Ṭālib Kalīm）の項で，カリームは孔雀の玉座やアクバラーバードの素晴らしさ，デカンの旱魃，カシミールの難路，カシミールの春の見事さについて技巧的で魅力的な詩を書いたが，「それらからは旅行者も歴史家も何一つ益を得ることはない。彼の繊細な思考（nāzuk-khayālī）には――それは当時，高く評価されていたものである――見るべきものがあるが，残念なことに，当時の偉大な詩人たちは事の真の利得について考えていなかった。嗜好と気晴らしを重視していたのである」（Ibid., p. 230）と，技巧的，非現実的な詩に対して批判的な言葉を記している。

美文集『奇想の魔術』に収められた「遍き名声と永遠なる存続の宮廷」というエッセイにも，現実性を喪失したペルシア詩に対するアーザードの批判的な姿勢が表れている。このエッセイは，18 世紀イギリスの随筆家アディソン（Joseph Addison 1672-1719）の “The Vision of Fame” の翻案で――Ṣādiq や Farrukhī は原題を “Vision of the Tables of Fame”（*The Tatler*, no. 81）と記しているが（Muḥammad Ṣādiq, *Āb-e Ḥayāt kī Ḥimāyat mēṅ aur Dūsrē Maẕāmīn*, Majlis-e Taraqqī-e Adab, Lahore, 1973, p. 146. Farrukhī, op. cit., vol. 2, p. 352），アディソン著作集（Frazer, James George, ed., *Essays of Joseph Addison*, vol. 1, Macmillan, London, 1915）ではエッセイの題名は，“The Vision of Fame”（*The Tatler*, no. 81, October 15, 1709）となっている――, 妖精の笛に魅せられて高い山に登ってきた人々の中から歴史的に重要な人物を入り口にいる歴史家たちが宮廷の中に招き入れるという内容であるが，アーザードは次のように非現実的な詩を書くペルシア詩人たちを批判的に描いている。

「イラン人，トゥーラーン人の大勢の集団が現れた。彼らは皆，きちんとした，立派な身なりであったが，その様子はそれぞれ異なっていた。或る者は紙片を持ち，或る者は書物を脇に抱えていた。その頁は美しく飾られており，さながら薔薇園のようであった。自分たちは意味と主題の画家であると彼らは主張していた。これに関して大きな論争が起き，彼らはこう告げられたのであった――君たちは確かに優れた画家である。しかし，非現実的な物を描く画家である。君たちの絵には現実性の色彩がない。採るべきものがないではないが…。彼らはペルシア語の詩人たち――アンワリー、ハーカーニー、ザーヒル・ファルヤービー（Ẓāhir Faryābī）など――であった。何人かの者たちが選ばれ，中に入った。残りの者たちは追い出された。」（*Nairang-e Khayāl*, Majlis-e Taraqqī-e Adab, Lahore, 1986, pp.151-152）

ペルシア語散文の歴史を辿った『ペルシアの詩人たち』の第 2 部第 4 講演でも，アーザードは，ペルシア語散文の歴史を意味伝達を目的とする平易な散文が技巧的な散文に堕落していく歴史として描写し，随所で過度の技巧使用に批判的に言及している。一例を挙げておく。

「上記の表現法（比喩的表現法）は大いに人気を得て，あらゆる著作は比喩だらけになってしまった。比喩が用いられていないような事件・出来事や（恋の）遣り取り（の描写）はなかった。そのような表現法は，『装飾的表現（rangīṅ-bayānī）』、『繊細な思考（nāzuk-khayālī）』、『意味の創出（ma‘nī-āfrīnī）』と呼ばれ始めたが，中身は何ら変わり映えしなかった。（…）次第に平易な表現や淀みのない文章はペルシア語から消えていった。それどころか事実の描写や有意味な表現を行う力すら消えてしまったのである。そして誇張や技巧という傷――それはペルシア語の特徴である――をペルシア語は負ってしまったのである。イランの人々はペルシア語の支配者であった。アフガニスタン，トルキスタン，インドの人々はみなその弟子であった。イランで素晴らしいと思われたこと，その真似をすることが名誉になると誰もが思い，彼らのペンはイランの人々の物真似をし始めた。彼らはペルシア語母語話者ではなかった。この哀れな者たちの言葉はしばらくすると弱々しくなり，遂には麻痺状態に陥ってしまった。」（p. 85）

アーザードは, カージャール朝第 4 代君主ナースィルッディーン・シャー（Nāṣir-ud-Dīn Shāh 在位 1848-1896 年）の西欧化の時代に平易なペルシア語散文が復権したことを歓迎して次のように述べている。

「シャーはヨーロッパ列強の勢力を見て国が危機にあると知り，観察の結果，学問，技芸，技術革新がヨーロッパに隆盛をもたらしたと知り，有能な学生をパリに送った。多くのヨーロッパの学者を招き，学院や工科学校を開いた。自身もヨーロッパを旅行し, 教育施設や工場を視察した。翻訳や著作の道が開かれ, 多くの本がフランス語, ドイツ語, 英語から訳された。歴史，地理や学者，哲学者，詩人の伝記も書かれた。新教育はこう教えた――このような内容はイラン本来の自然な言語（mulk kī ṭab‘ī zabān）にしか表現できないことである，と。こうしてそれは復権のローブを得て，過度の想像性（khayāl-bandī）はイランから，いや，想像の国からも追放されたのである。」（p. 95）

「イランの著作がかつて我々の模範であったように，現在でもそれは優れた模範である。文化的にそれは模範なのである。明快で平易な書物の中で,『ナースィフッタワリーフ（*Nāsikh al-Tawārīkh* カージャール朝の歴史家 Mirzā Muḥammad Taqī Sipihr とその息子が著した歴史書）』」の文体は，我々にとって改革の指針となるものである。それには作為，装飾，技巧の影響を受けた馬鹿げた言葉がまったく用いられていない。内容を表現することのみが重視されており，表現すべき内容を素直に表現する，率直な，選び抜かれた言葉が用いられている。」（p. 96）

おわりに

『ペルシアの詩人たち』に収められた講演「ペルシア詩の歴史」は，

（1）アーザードがペルシア詩の歴史を自然で平易な段階から技巧によって複雑化し，非現実的になる過程として認識していたこと

（2）西欧の批判の眼を意識しつつ，複雑化し，非現実的になった詩を再度，自然で現実的な形に戻す必要があると考えていたこと

を明瞭に示している[23)]。このような文学史観，改革思想はウルドゥー詩に対する見方と共通であり，短いながらもこの講演は，アーザードの文芸思想形成期を研究するための資料として，また，彼の主著『生命の水』を理解するための資料として，さらに，近代インドにおけるペルシア詩理解の動向を知るための資料としても極めて重要であると言えるであろう。

23）アーザードが『ペルシアの詩人たち』において，表現法だけでなく，詩の内容が美と恋中心になっていることを批判していることにも注意しておきたい。

「問題は，素晴らしい風土があり，心の安らぎがあったこと。そして自分たちの帝国があり，富の蓄積があったこと。気は大きく，自尊心は強くなり，まるで火薬の中で火花を散らしたように，酒に火をつけたようになってしまった。肝心なことは忘れ去られ，万物に美と恋を見るようになった。ああ，何ということであろうか。万物の心には恋があり，万物は思慕の念に突き動かされている。夜鶯（ブルブル）は薔薇を，鳩は糸杉を，蛾は蠟燭を愛し，鉄は磁石を，藁は琥珀を，夜露は太陽を，山鶉は月を慕っている。（…）このようなことはこの言葉（ペルシア語）では当たり前のことになっているので，このようなことを述べたいときには，少し仄めかすだけである。理解できるものは労なく理解でき，味わい，感動することができるが，この言葉を知らぬ者は呆然とするのである―― 一体何の話なのであろうか，と。この混乱は詩から始まった。ペルシア詩の歴史を見れば解るが，この詩題は600年前に現れ，この言葉を，それが領地であるかのように支配したのである。恋愛詩は以前にもあったが，現在のように支配的でもなく，悪名をもたらす程でもなかった。」（p. 217）